

## カンブルランがもたらしたもの

対談 寺西基之 × 鈴木淳史



シルヴァン・カンブルランは、2010年4月から読響の第9代常任指揮者を務め、いよいよ来年3月に退任します。この9年間を音楽評論家のお二人、寺西基之さん(写真左)と鈴木淳史さんに振り返っていただきました。

### 緻密な音作りと プログラム構成の妙

—カンブルランは10年4月に常任指揮者に就任しました。その頃の印象はいかがでしたか？

**寺西**：就任前の06年12月の初共演時にメシアンのトゥランガリラ交響曲を最初に聴いて、今までの読響にはない明晰な響きに驚きました。読響の常任に決まって、良いものをもたらしてくれるだろうとの期待を持ちました。

**鈴木**：カンブルランには関心を抱いて

いたので、就任のニュースを聞いたときは、よくぞ彼を選んでくれたと興奮したものです。最初に印象に残っているのは、10年11月のストラヴィンスキー〈火の鳥〉。読響がカンブルランの色彩の音になって、東京芸術劇場のホールにしっかりと音が収まっていて驚きました。

**寺西**：それまでの読響の音楽の作り方と違うと感じました。例えば、第7代(98-07)のアルブレヒトは起承転結がハッキリとしていて、全体を造形してから整えていくイメージでしたが、

カンブルランは細部を緻密に積み上げながら、全体を絶妙なバランスで作っていく。

**鈴木**：同感です。カンブルランはサウンドからの発想で、響きをどう作って、どう空間を満たすか、という音楽。音楽を使ってドラマを表現するわけではなく、音楽そのものがドラマだと表しているかのようでした。

—カンブルランの音楽作りの特徴はどんなところでしたか？

**寺西**：音と音との関係、音色のコントラスト、そのあたりを綿密に表現しながら作品の持つものを引き出しています。音の透明感や微妙な色彩感が表れる音楽になった。読響が持っていた潜在的なものを引き出してくれました。

**鈴木**：それまでの読響の骨太でパワフルな印象が一転しました。読響に足りなかったものを、カンブルランが埋めた感じ。順応性が高まって、他の客演指揮者が来てもフレキシブルに対応できるようになりました。また、プログラムの構成で聴かせることは画期的でした。カンブルランのプログラムは頭で考えても分からないこともありましたが、実演に接して納得したことの方が多かったですね。例えば、14年1月のガブリエリ、ベリオ、ベルリオーズのプログラム。教会のような古楽的な響きに始まり、ベリオのダイナミックレンジの広い音楽で耳の中を一気に

広げられるような感覚に。そして最後、緻密なベルリオーズ〈イタリアのハロルド〉が印象深く響きました。彼ならではの大胆な試みでした。

**寺西**：確かに面白い演奏会でした。ヴァイオラ・ソロが最後にPブロックで演奏するなど、空間の使い方も印象的です。一方でテーマ性を持って組まれたプログラムもあり、興味深かったのは15年4月のリームとブルックナーの組み合わせ。リームの重苦しい暗さと、ブルックナーの透明な響きのコントラストには、なるほどと思いました。

### 新鮮に蘇る名曲たち

—印象に残った演奏を挙げていただけますか？

**寺西**：まずは11年9月のベルリオーズ〈ロミオとジュリエット〉。劇的に煽ることはせず、各部分をきちっとバランスよくまとめながらコントロールした響きを作っていました。散漫に聴こえることがなく、こんなに面白い曲なのかと感じました。

**鈴木**：カンブルランのベルリオーズは、大曲でも響きが広がりすぎることなく自然に流れを作っていました。声楽の使い方も上手い。ベルリオーズとメシアンはカンブルランの二大看板だったと思います。

**寺西**：メシアンも見事でした。17年1

月の〈彼方せんこうの閃光〉は、本当に素晴らしかった。スタティックな中に光がぱっと見えて、絶妙でした。メシヤンの音楽を、音楽史の中でごく自然に捉えているように思いました。

**鈴木**：14年12月のトゥーランガリラ交響曲が、他の指揮者とぜんぜん違うことに驚きました。旋律を浮き立たせたりせず、ドラマティックに作らない。色彩的でありながら、空に漂う雲のようでした。

**寺西**：他には16年10月のシューベルト〈グレート〉も音の力学、音の持つダイナミズムを感じさせるものでした。16年6月ブルックナーの3番は宗教的なイメージは一切なく、新鮮でした。

**鈴木**：これらの演奏は、シューベルトがブルックナーに繋がるつなことが透かして見えるようでした。11年4月のスメタナ〈モルダウ〉も面白かった。歴史なんて背負わない音だけの構築。彼のマーラーは、ドロドロせず、騒ぎもせず、暴れもしないもの。色眼鏡をかけずにスコアを見ているのが分かりました。

**寺西**：13年3月の6番〈悲劇的〉は、純粋に音だけから興奮するものになっていました。

**鈴木**：18年4月のアイヴズと組み合わせたマーラー9番も面白かった。二つを続けて聴いて、マーラーとアイヴズの密接な繋がりがよく聴き取れました。他には12年10月、細川俊夫〈ヒ

ロシマ・声なき声〉は、カンブルラン&読響の中で最も“ドス黒い”印象が残ったものでした。重いメッセージが響きに表れていました。

**寺西**：そうですね。細川作品の終盤の祈りの部分など、とても自然に響きました。

## 二つのオペラでの成功と集大成への期待

—15年9月にワーグナー〈トリスタンとイゾルデ〉、17年11月にメシヤン〈アッシジの聖フランチェスコ〉というオペラ作品にも挑みました。

**寺西**：〈トリスタン〉はドイツ的なものではなく、流れが良く、声とオーケストラとの音の綾あやが精妙に組み立てられ、和声感で微妙な光と影が出ていました。

**鈴木**：前奏曲からして一般的な演奏とは違うものでした。悩ましいものがなくて、純粋な音楽。毒を飲んで染みわたる場面は、すごく綺麗きれいでした。愛の喜びの音楽が前面に出ていた。これを聴いて〈アッシジ〉、イケるんじゃないかと思いました。

**寺西**：ほう。〈トリスタン〉を聴いて、〈アッシジ〉を予想できたんですね。〈アッシジ〉については、私は86年の小澤征爾さんの抜粋上演を聴いていたので、全曲の日本初演をいつ、どこがやるのかと待っていました。結果、理想



15年〈トリスタン〉公演 ©読響

的なコンビでの上演となりました。この複雑で長大な曲を細部まで精妙に作り、緩みなく音にしていました。陶酔感を味わえた不思議な体験で、長さを感じませんでした。

**鈴木**：〈アッシジ〉は、音の中に入りこむような体験で、音と一体化できました。カンブルランと読響の関係が深まった時期に取り上げたことが成功の秘訣ひみつですね。日本の演奏史に残るものになりましたし、自分にとっても大きな音楽体験でした。もう、今世紀ベストワンと言ってよいと思います(笑)。

**寺西**：本当に、よくやりました。通常、常任指揮者とオーケストラの関係は、長年続くと必ずどこかで緩むときがあります。でも、カンブルランと読響からはそれを感じなかった。〈アッシジ〉でも両者の関係がさらに深まりました。—いよいよ残すところ、今月と来年3月だけになりました。

**寺西**：9月28日のプログラムはカンブルランらしく、ラヴェル〈ラ・ヴァルス〉に何か特別な意味を感じます。3月のシェーンベルク〈グレの歌〉にも

期待したいです。紀尾井ホールでの特別演奏会(41頁参照)の曲目も注目に値します。カンブルランの置き土産のようですね。

**鈴木**：3月の特別演奏会、ガチですね。以前からグリゼーは聴きたいと思っていました。エマールの共演も楽しみです。9月も3月も隙がないぐらいの集大成。就任前後のプログラムと照らし合わせると、同じベルリオーズの〈幻想〉やシェーンベルク作品を取り上げるなど、円環的に持ってきているように感じました。ドビュッシー〈海〉も06年の初共演のメインでしたし。

**寺西**：改めてこの9年間、カンブルランがもたらしたものが大きかったと思います。音と音との関わり方、明晰な響きの作り方など。読響は、今後もこれらを活かしてほしいですね。

**鈴木**：カンブルランは、常にフレキシブルな点がよかったです。プログラム構成に始まり、演奏方法や響きの作り方など。過去の何かにとらわれなかったと思います。その姿勢は、今後も引き継いでいってほしいものです。

Profile

寺西基之(てらにし・もとゆき) 音楽評論家  
執筆活動を行う一方、東京交響楽団監事、東京二期会評議員、アフィニス文化財団理事などを務める。共訳書にグラウト/パリスカ『新西洋音楽史』、共著に『ピアノの世界』など。

鈴木淳史(すずき・あつふみ) 音楽評論家  
著書に『クラシックは斜めに聴け!』『クラシック悪魔の辞典』『クラシック音楽異端審問』など。共著に『村上春樹の100曲』などがある。Twitter: @suZukiatSufmi

心に残るクラシック

## ヤマザキマリ——②

Mari Yamazaki

## 北の大地と母の思い出

シューベルト：ピアノ五重奏曲〈ます〉 イ長調 D667



©川上尚見

自分の人生で最もたくさん耳にしてきた生演奏でのクラシックの楽曲は、間違いなくシューベルトのピアノ五重奏曲〈ます〉だろう。この室内楽曲は私にとって、母との北海道の暮らしにおけるBGMであった。私が40歳近くになって発表した「ルミとマヤとその周辺」という漫画作品は、まさにこの楽曲をイメージしながら描いた、我々3人家族の北海道での暮らしの記録である。

神奈川県くげぬまの鶴沼で生まれ育った母は湘南のミッションスクールに通っていた頃、幼い頃から習っていたヴァイオリンをヴィオラに持ち替え、音楽を生業なりとして生きていきたいと思うようになるわけだが、終戦直後の混沌こんとんの中で、女性が芸能で生計を立てていく意図など親に理解されるわけもなく、その暫く後に彼女は半ば勘当されるようなかたちで北海道へ移住した。縁もゆかりもない、知り合いすらいない北

海道で、できたばかりの交響楽団に女性団員1号として入り、その後彼女は人生の殆どをこの地で過ごすことになる。母曰く、当初はそのうちまた実家いわに戻るつもりでいたというが、それにしても私の記憶の中での当時の母は、とにかく北海道にいるのが楽しくて、うれしくて仕方がなさそうだった。学生時代の友人なんか遊びにくると「まるでドイツやオーストリーみたいじゃない、北海道の自然って！」と誰よりも嬉々とした表情をしていたのを思い出す。

母はもともとオーケストラの楽曲よりも、室内楽が好きだった。オーケストラのメンバーや地元のピアニストたちと組んで、時間さえあれば私たちが当時暮らしていた狭い市営住宅の部屋に集まって、トリオだのカルテットだのクインテットだのをやっていた。オーケストラの仕事でただでさえ忙しい母なのに、オフ日があればそんなふう

に過ごすのである。

ランドセルを背負って学校から戻ると、住宅の入り口のずっと手前から弦楽器やピアノの音が聞こえてきて、そんな時、私は仕方なく居場所を占拠されてしまった家に入り、部屋の片隅で宿題をしたり本を読みながら、大人たちの盛り上がりを見ながら眺めていた。そんな母たちが飽くことなく何度も何度も奏でていたのが〈ます〉だった。

夏になると、私はよく近所の川へ遊びに出かけ、男の子たちと一緒に土手から浅瀬に入って魚を捕まえたり泳いだりして遊んでいたのだが、豊かな緑が生い茂る中を悠々と流れるこの川の様子がこの楽曲ととてもよくマッチングした。支笏湖しこつこを源に流れるこの一級河川には、水がきれいでないといふ生息できないヤマメやニジマスといった魚たちが泳いでいて、今でも上流へ行けば釣り人が糸を垂れている。私がしょっちゅう川に行き遊んでいるのを羨ましく思ったのか、ある日、自分も一緒に川遊びに連れて行ってほしいと母が申し出てきたことがあった。私たちは普段自転車を使わなければいけない上流の、とっておきの場所へ母を連れていった。川遊びに慣れている子供らと違って慎重さを欠いた母は、はしゃいでいるうちに浮き輪を付けたままあっという間に流されてしまい、暫くしてからびしょ濡れのまま「まいった、



フランツ・シューベルト

まいった、あははは」と笑いながら戻ってきたが、その天真爛漫らんまんな笑顔は、家で音楽仲間と合奏をしているときに見せているのと同じものだった。〈ます〉はおそらく、北海道を移住地として選んだ母のモチベーションを上げるのに、一番ぴったりの曲だったのだろう。

〈ます〉は、まだ22歳でやる気満々だったシューベルトがドイツ・リートとして作ったものを自ら五重奏曲に編曲したものだが、歌曲の歌詞の内容は美しい川の流れの中を泳ぐ鱒ますを女性、その鱒を狙うのに姑息な手段をとる釣り人を男性と揶揄した内容になっている。しかし、私にとってこの曲はまさにたおやかで雄大な川の流れそのものであり、太陽の光を浴びてキラキラ光る水面から元気に飛び跳ねる鱒の姿と、楽器を奏でたり川で遊んだりしながら人生を謳歌おうかしていた母の姿を生き生きと描き出すものなのである。

◎ヴァイオリン奏者

## 太田博子

Hiroko Ota

魂が震える瞬間に  
携われる喜び

「9月の公演では、留学で学んだドビュッシーやラヴェルなどフランスの作品もあります。また、中学時代を過ごした福岡での公演もありますね」

東京芸術大学4年の時に、フランスのヴァイオリニスト、ジェラルド・プーレ先生に師事しました。当初ドイツやオランダへの留学を考えていましたが、プーレ先生の推薦もあって、スイス・ジュネーヴでフランス人のジャン＝ピエール・ヴァレーズ先生のもと、3年間マスター課程で勉強しました。フランス的な明るい街の雰囲気が肌に合いましたし、フランスの作品に多く触れ、独特の和声感やその美しさを実感しました。読響に入団した時からぜひ弾いてみたかった曲が、《定期》で演奏するラヴェル〈ラ・ヴァルス〉だったので、ようやく実現して大変楽しみです。3拍子の踊り（ワルツ）の独特なリズムを感じていただけたら、と思います。

福岡は父親の出身地で、私の名前も

「博多」から取ったと聞いています。中学時代、アクロス福岡でのヴァイオリンセミナーに通っていたことを思い出します。10年以上前から、当時セミナーで教わっていた景山誠治先生が率いるアクロス弦楽合奏団に参加して演奏活動も行っているんですよ。

「東京芸大を経て、ジュネーヴ音楽院マスター課程を首席、最高位で卒業。室内楽に積極的に取り組み、スイス・ロマン管弦楽団等へも定期的に出演。第49回福山音楽コンクールで最年少優勝、第49回全日本学生音楽コンクール大阪大会及び第51回同コンクール福岡大会で第1位など受賞歴も多い」

3歳の時に、「ヴァイオリンをやりたい」と両親に言ったようです。子供用のヴァイオリンを初めて手にした時の感激は今でも忘れられませんね。小学校は福山（広島）、中学校は福岡で過ごしましたが、小学5年から中学卒業まで小栗まち絵先生に師事し、一人で大阪に月2回レッスンに通いました。中学に上がる時に小栗先生から言われた言葉が、今でも印象に残っています。「先生は種に水をかけて育てることはできても、種をまいてあげることはできない。みずから種をまくの



よ」。中学生以降は、「何を表現したいのか」を自分で考えなければ成長しないという意味が込められています。

その後、憧れと刺激を求めて、東京芸大附属高校、芸大に進学。切磋琢磨できる仲間の大切さを身に沁みて感じました。

「2014年に読響に入団してからの4年間はいかがですか。今年4月から、第二ヴァイオリンから第一ヴァイオリンへ変わりました」

室内楽も好きですが、大編成の曲に挑戦したい、とオーケストラを志望しました。この4年間、素晴らしい作品や指揮者、演奏に出会い、魂が震える瞬間を何度も体験できたことは大きな糧となっています。2015年の欧州ツ

アーでは、大好きなベルリン・フィルの本拠地のホールで演奏できたこと、また昨年のメシアンの大作オペラ〈アッシジの聖フランチェスコ〉が特に印象に残っています。

ヴァイオリンの席順は2年に1度見直します。今回は人数調整の関係で、その途中で入れ替えがありました。第一はメロディーを、第二は内声を奏でることが主な役目です。ほとんどのヴァイオリニストは、幼少期よりメロディーを弾く教育を受けてきていますが、支えたり、誘導したりする第二もとても重要な役割を担っていて、どちらも楽しいですよ。

「今後の目標を聞かせてください」

留学する前は、音程を外さないことやミスをしてはいけないことばかりを意識してしまい、その緊張から神経質になって落ち込むことが多かったような気がします。留学してヴァレーズ先生から、「一番大切なことは、まず音楽を楽しむこと」と言われ、肩の力が抜けて気持ちが楽になりました。奏者が楽しんでいないと、お客様にも伝わりませんしね。

これからも、演奏者や事務局、聴衆の皆さまなど、いろいろな人と力を合わせて、感動したり心が震えたりするような公演を数多く作っていきたくです。そのためには余裕がないと楽しめません。日々、練習と吸収です。

古楽界の鬼才アントニーニが初登場。女王ムローヴァが共演!

10/16 (火) 19:00 第616回 名曲シリーズ  
サントリーホール

ハイドン：歌劇〈無人島〉序曲  
ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲、交響曲 第2番  
指揮：ジョヴァンニ・アントニーニ ヴァイオリン：ヴィクトリア・ムローヴァ



ジョヴァンニ・アントニーニ

アントニーニが自らリコーダーも披露し、名人アヴィタルが魅せる

10/20 (土) 14:00 第211回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

10/21 (日) 14:00 第211回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

ヴィヴァルディ：ドレスデンの楽団のための協奏曲、リコーダー協奏曲  
J. S. バッハ：マンドリン協奏曲 ハイドン：交響曲 第100番〈軍隊〉ほか  
指揮&リコーダー：ジョヴァンニ・アントニーニ マンドリン：アヴィ・アヴィタル



アヴィ・アヴィタル

日下紗矢子ら読響メンバーが繰り広げる白熱のアンサンブル

10/22 (月) 19:30 第19回 読響アンサンブル  
よみうり大手町ホール ※19:00開演 完売

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》  
ヴァイオリン：日下紗矢子 (読響特別客演コンサートマスター)  
チェンバロ：北谷直樹

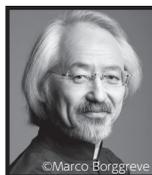


日下紗矢子

鈴木雅明&世界最高峰のRIAS室内合唱団による極上の響き

10/26 (金) 19:00 第582回 定期演奏会  
サントリーホール

モーツァルト：交響曲 第39番  
メンデルスゾーン：オラトリオ〈キリスト〉、詩篇第42番ほか  
指揮：鈴木雅明 ソプラノ：リディア・トイシャー  
テノール：櫻田 亮 合唱：RIAS室内合唱団

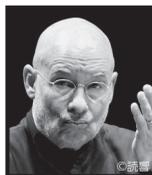


鈴木雅明

名匠デイヴィスがシベリウスの名曲で熱いタクトを振る!

11/23 (金祝) 14:00 第107回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール

エルガー：チェロ協奏曲 シベリウス：交響曲 第1番ほか  
指揮：デニス・ラッセル・デイヴィス チェロ：ハリエット・クリーフ



デニス・ラッセル・デイヴィス

# 10月~11月23日 公演の聴きどころ

10月は古楽界で活躍する二人の指揮者が登場する。前半は、イタリアの古楽アンサンブル“イル・ジャルディーノ・アルモニコ”を率いる鬼才アントニーニが、二つのプログラムを披露。16日の《名曲シリーズ》ではベルリン・フィルとの名演も話題を呼んだベートーヴェンの交響曲第2番などを振る。ベートーヴェンの協奏曲では、ロシア出身の世界的ヴァイオリニスト、ムローヴァが約2年半ぶりに共演。アントニーニとは欧州で一緒の舞台を何度も経験しており、日本でも息の合った演奏を繰り広げるだろう。

20、21日の《マチネーシリーズ》は、古楽界の風雲児アントニーニが、自らリコーダーも披露しヴィヴァルディの協奏曲などを取り上げるほか、ハイドンの交響曲から人気の第100番〈軍隊〉で鮮烈にオーケストラを鳴らす。また、協奏曲では“マンドリン界のプリンス”として革新をもたらしているアヴィタルが、躍動感あふれるスリリングな演奏で会場を沸かせる。

26日の《定期演奏会》は、バッハなどの古楽器演奏で世界的評価を得ている鈴木雅明が15年ぶりに読響の指揮台に立つ。メンデルスゾーンの合唱作品では、宗教曲などを得意とするドイツ人ソプラノ歌手トイシャー、バッハ・コレギウム・ジャパンなどで活躍する櫻田亮、そしてベルリンを拠点とし世界最高峰の合唱団として高名なRIAS室内合唱団と共に、極上のハーモニーを聴かせてくれるだろう。

11月23日の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》は、欧米で活躍する名匠デイヴィスが2015年以来約3年ぶりに客演する。シベリウス若き日の秀作・交響曲第1番で、北欧の自然を思わせる美しいメロディーを力強く響かせる。また、オランダの新鋭クリーフがソロを奏でるエルガーのチェロ協奏曲は、寂寥感(せきりょう)が全編に漂う傑作。しみじみと心に沁みる名演に期待が高まる。(文責：事務局)

## 1回券料金表

定期・名曲・みなとみらい	S ¥7,500	A ¥6,500	B ¥5,500	C ¥4,000
マチネー	S ¥7,500	A ¥5,500	B ¥4,500	C ¥4,000
定期 (10/26公演)	S ¥9,500	A ¥7,500	B ¥6,000	C ¥4,500
12月〈第九〉	S ¥9,500	A ¥7,500	B ¥6,000	C ¥4,500
大阪定期	BOX ¥8,500	S ¥6,100	A ¥5,100	B ¥4,100

ジャズの要素がふんだんに盛り込まれたアダムズの衝撃作

11/28 (水) 19:00 第583回 定期演奏会  
サントリーホール

スロヴァチェフスキ：ミュージック・アット・ナイト  
モーツァルト：フルートとハープのための協奏曲  
アダムズ：シティ・ノワール

指揮：デニス・ラッセル・デイヴィス  
フルート：エマニュエル・パユ ハープ：マリー＝ピエール・ラングラメ



エマニュエル・パユ

上岡がピアノを弾き、読響メンバーと室内楽を披露

12/4 (火) 19:30 第20回 読響アンサンブル・シリーズ  
よみうり大手町ホール ※18:50から解説 **完売**

《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》

ブラームス：ピアノ四重奏曲 第3番  
マーラー：ピアノ四重奏曲 断章  
ボロディン：ピアノ五重奏曲

ピアノ：上岡敏之 ヴァイオリン：赤池瑞枝、荒川以津美、山田友子  
ヴィオラ：長岡晶子、渡邊千春 チェロ：松葉春樹、室野良史



上岡敏之

歓喜の歌！ イタリアの名匠が指揮するベートーヴェン〈第九〉

12/19 (水) 19:00 FUJITSU Presents Concert (第九) 特別演奏会  
サントリーホール

12/20 (木) 19:00 第617回 名曲シリーズ  
サントリーホール

12/22 (土) 14:00 第212回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

12/23 (日祝) 14:00 第212回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

12/24 (月休) 14:00 第108回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール

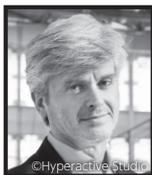
12/25 (火) 19:00 SHINRYO Presents (第九) 特別演奏会  
東京芸術劇場コンサートホール

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉

指揮：マッシモ・ザネッティ

ソプラノ：アガ・ミコライ  
メゾ・ソプラノ：清水華澄  
テノール：トム・ランドル  
バス：妻屋秀和

合唱：新国立劇場合唱団 合唱指揮：三澤洋史



マッシモ・ザネッティ



アガ・ミコライ



清水華澄



トム・ランドル



妻屋秀和

首席客演指揮者・山田の〈オルガン付き〉&〈ローマの祭〉

1/8 (火) 19:00 第618回 名曲シリーズ  
サントリーホール

サン＝サーンス：交響曲 第3番〈オルガン付き〉  
ラロ：チェロ協奏曲  
レスピーギ：交響詩〈ローマの祭〉

指揮：山田和樹(首席客演指揮者) チェロ：ニコラ・アルトシュテット



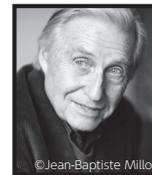
山田和樹

山田が千夜一夜物語を振り、スペインの国宝級の巨匠が共演！

1/12 (土) 14:00 第213回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

1/13 (日) 14:00 第213回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

ラヴェル：高雅で感傷的なワルツ  
ラヴェル：ピアノ協奏曲  
リムスキー＝コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉  
指揮：山田和樹(首席客演指揮者) ピアノ：ホアキン・アチュカロ



ホアキン・アチュカロ

ワーグナーから藤倉作品まで、山田が描く神秘的な音世界

1/18 (金) 19:00 第584回 定期演奏会  
サントリーホール

諸井三郎：交響的断章  
藤倉 大：ピアノ協奏曲 第3番〈インパルス〉(共同委嘱作品/日本初演)  
ワーグナー：舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から第1幕への前奏曲  
スクリャービン：交響曲 第4番〈法悦の詩〉

指揮：山田和樹(首席客演指揮者) ピアノ：小菅 優



小菅 優

ウィーンの俊英ゲッツェルとジャズ界の鬼才・小曾根が初共演

1/31 (木) 19:00 第22回 大阪定期演奏会  
フェスティバルホール(大阪)

ワーグナー：楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉  
第1幕への前奏曲  
モーツァルト：ピアノ協奏曲 第23番  
ブラームス：交響曲 第1番

指揮：サッシャ・ゲッツェル ピアノ：小曾根 真



サッシャ・ゲッツェル

お申し込み・  
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390  
(10:00~18:00/年中無休) ヨミキョー  
ホームページ・アドレス <https://yomikyo.or.jp/>

## 井上道義&読売日本交響楽団 マーラー〈千人の交響曲〉

■ 10/3 (水) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：井上道義

ソプラノ：菅 英三子 ほか

マーラー：交響曲 第8番〈千人の交響曲〉

[料金] S ¥7,000 A ¥6,000 B ¥5,000 C ¥4,000 D ¥3,000

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス

0570-010-296 (10~19時/休館日を除く)

---

## 多摩市民感謝コンサート

■ 10/6 (土) 15:00 パルテノン多摩 大ホール

ウェスタ川越 特別演奏会「クラシック名曲の旅」

■ 10/7 (日) 14:00 ウェスタ川越 大ホール

指揮：鈴木優人

ギター：村治佳織

モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク

ロドリゴ：アランフェス協奏曲

ムソルグスキー（ラヴェル編）：組曲〈展覧会の絵〉

●多摩 [料金] 多摩市民・アテナ会員 ¥3,000 一般 ¥4,800 高校生以下 ¥1,000

[お問い合わせ] チケットパルテノン 042-376-8181 (10~18時/休館日を除く)

●川越 [料金] S ¥5,000 (大学生以下 ¥4,500) A ¥4,000 (大学生以下 ¥3,500)

[お問い合わせ] ウェスタ川越 049-249-3777 (9~19時/休館日を除く)

---

## NISSAY OPERA 2018 オペラ〈ゴジ・ファン・トゥッテ〉

■ 11/10 (土) 13:30、11/11 (日) 13:30 日生劇場

指揮：広上淳一 演出：菅尾 友

出演：嘉目真木子、高野百合絵、市川浩平、加未 徹 ほか (10日)

高橋絵理、杉山由紀、村上公太、岡 昭宏 ほか (11日)

モーツァルト：歌劇〈ゴジ・ファン・トゥッテ〉 全2幕

(イタリア語原語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥9,000 A ¥7,000 B ¥5,000 学生 ¥3,000

[お問い合わせ] 日生劇場 03-3503-3111 (10~18時)